

BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ユーザマニュアル

八登崇之 (Takayuki YATO; aka. “ZR”)

v1.1 [2016/02/14]

注意

このマニュアルは暫定版であり、内容に不完全な点がある。

BXJS 文書クラスについては、“T_EX Wiki” 中の記事、^{*1}およびそこからたどれるサイトにある情報も参照してほしい。

1 概要

本パッケージに含まれる文書クラス集（以下では BXJS（文書）クラスと呼ぶ）は、奥村晴彦氏製作の「pL^AT_EX 2_ε 新ドキュメントクラス」（以下では JS（文書）クラスと呼ぶ）の拡張版に相当する。JS クラスのレイアウトデザインと機能をほぼ踏襲しているが、以下の点で改良が加えられている。

- JS クラスは pL^AT_EX と upL^AT_EX のみをサポートするが、BXJS クラスはこれらに加えて pdfL^AT_EX と X_YL^AT_EX と LuaL^AT_EX をサポートしており主要エンジンの全てで使用可能である。
- (u)pL^AT_EX 以外では各々のエンジンの日本語処理パッケージを利用するが、“標準設定”を用いることで、それらのパッケージの設定を書かずに済ませられるので、pL^AT_EX 並に簡単に日本語の文書を書き始めることができる。
- JS クラスでは、フォントのオプティカルサイズを最適にするため、（基底フォントサイズが 10pt 以外の時に）T_EX の版面拡大（mag）機能を利用しているが、これが他のパッケージと衝突して不具合を起こすことがある。BXJS クラスでは mag 機能を使う他に別の方式を選べるようにしている。
- 用紙サイズや基底フォントサイズについて、任意の値を指定することができる。

^{*1} <https://texwiki.texjp.org/?BXjscls>

2 最も基本的な使い方

ここでは、BXJS クラスを“標準設定”（standard和文ドライバ）で用いる場合について解説する。この場合、`\documentclass` 命令を次のように書く。^{*2}

```
\documentclass[⟨エンジン⟩,⟨ドライバ⟩,ja=standard,jafont=⟨フォント指定⟩,⟨他オプション⟩]
{⟨クラス名⟩}
```

- `⟨エンジン⟩` の指定は必須で、実際に使っている「 \LaTeX のコマンド名」を書く。`latex`、`platex`、`uplatex`、`pdflatex`、`xelatex`、`lualatex` が指定できる。
- DVI 出力のエンジンを使う場合は、`⟨ドライバ⟩` の指定が必須で、これは実際に使っている「DVI ウェアの名前」を書く。`dvips`、`dvipdfmx`、`dviout`、`xdvi` が指定できる。PDF 出力のエンジンの場合は `⟨ドライバ⟩` の指定は不要である。
- “標準設定”を適用するので `ja=standard` を指定する。（`ja` の代わりに `jadriver` と書いてもよい。）
- 既定以外のフォント設定を利用する場合は、`⟨フォント指定⟩` にその名前を書く。既定の設定を用いる場合は `jafont=...` 自体を省略する。
- その他のクラスオプション（`a4paper` 等）については、多くの場合 JS クラスと同じものが使える。
- BXJS クラスについて、`⟨クラス名⟩` は以下のものがある。
 - `bxjsarticle`：章のないレポート（`jsarticle` に相当する）
 - `bxjsreport`：章のあるレポート（`jsbook+report` に相当する）
 - `bxjsbook`：書籍（`jsbook` に相当する）
 - `bxjsslide`：スライド（`jsarticle+slide` に相当する）

\LaTeX で `bxjsarticle` クラスを用いた文書の例を示す。^{*3}

```
\documentclass[a4paper,xelatex,ja=standard]{bxjsarticle}
\usepackage[unicode,colorlinks,
  pdftitle={いきなり日本語}]{hyperref}
\title{いきなり日本語}
\author{七篠 権兵衛}
\begin{document}
\maketitle

\section{日本語で{\LaTeX}する}
中身はまだない。

\end{document}
```

以下では各エンジンについて、挙動を少し詳しく説明する。

^{*2} もちろんクラスオプションの順序は任意である。

^{*3} 組版結果における日付の出力は JS クラスと同様の「2015 年 7 月 3 日」の形式になる。

2.1 p_ΛT_EX の場合

例えば次の設定は：

```
\documentclass[a4paper,latex,dvipdfmx,ja=standard]{bxjsarticle}
```

対応する JS クラスを用いた次の設定と（ほぼ）等価になる^{*4}：

```
\documentclass[a4paper,dvipdfmx]{jsarticle}
```

次のように jafont を指定した場合は：

```
\documentclass[a4paper,latex,dvipdfmx,ja=standard,jafont=ms]{bxjsarticle}
```

その値をプリセットオプションとして pxchfon が読み込まれる：

```
\documentclass[a4paper,dvipdfmx]{jsarticle}
\usepackage[ms]{pxchfon}
```

2.2 up_ΛT_EX の場合

例えば次の設定は：

```
\documentclass[a5paper,uplatex,dvipdfmx,ja=standard]{bxjsarticle}
```

次の設定と（ほぼ）等価になる^{*5}：

```
\documentclass[uplatex,a4paper,dvipdfmx]{jsarticle}
```

jafont オプションの扱いは p_ΛT_EX の場合と同じである。

2.3 pdf_ΛT_EX の場合

エンジン指定が pdf_Λtex の場合、日本語処理パッケージとして bxcjkjatype（これ自体は内部で CJK パッケージを読み込む）を利用する。

例えば次の設定は：

```
\documentclass[a4paper,pdflatex,ja=standard]{bxjsarticle}
```

次の設定と大体同じであるが、ただし文書レイアウトは article でなく jsarticle とほぼ同じになっている：

```
\documentclass[a4paper]{article}
\usepackage[whole,autotilde]{bxcjkjatype}
```

jafont を指定した場合は：

^{*4} すなわち、論理フォントは明朝が jis、ゴシックが jisg が使われる。なお、BXJS では mingoth 等の論理フォント変更のオプションはサポートされていない。

^{*5} 論理フォントについては、従来のもの（明朝が upjisr-h、ゴシックが upjisg-h）に代わって、BMP 外の文字に対応したもの（明朝が upjpnrm-h、ゴシックが upjpngt-h）を採用した。組み方は従来のものと変わらない。

```
\documentclass[a4paper,pdflatex,ja=standard,jafont=ipaex]{bxjsarticle}
```

その値が `bxCJKjatype` のフォントプリセットになる。

```
\documentclass[a4paper]{article}
\usepackage[whole,autotilde,ipaex]{bxCJKjatype}
```

※補足：

- 自動的に文書本体が CJK* 環境^{*6}で囲まれかつ `\CJKtilde` が有効な状態になっている。従っていきなり日本語を書き始めることができる。ただし和欧文間空白（四分空き）は手動で ~ を入れる必要がある。^{*7}日本語出力の挙動の詳細については `bxCJKjatype` のマニュアルを参照してほしい。以下に完全な文書ソースの例を示す：

```
\documentclass[a4paper,pdflatex,ja=standard]{bxjsarticle}
\begin{document}
日本語で~pdf{\LaTeX}~するテスト。
\end{document}
```

- `bxCJKjatype` パッケージにおけるフォントの既定設定は「Type1 形式の IPAex フォント」（`ipaex-type1` パッケージ）である。一方、`ipaex` プリセットを指定した場合は「TrueType形式の IPAex フォント」が使われるので、両者の出力は“PDF データとしては”異なる（見かけは同じのはずだが）。^{*8}

2.4 Xe_ΛT_EX の場合

エンジン指定が `xelatex` の場合、日本語処理パッケージとして `zxjatype`（これ自体は内部で `xeCJK` パッケージを読み込む）を利用する。

例えば次の設定は：

```
\documentclass[a4paper,twocolumn,xelatex,ja=standard]{bxjsarticle}
```

次の設定と大体同じであるが、ただし文書レイアウトは `jsarticle` とほぼ同じになっている：

```
\documentclass[a4paper,twocolumn]{article}
\usepackage{zxjatype}
\setCJKmainfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexMincho}% 明朝→ IPAex 明朝
\setCJKsansfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexGothic}% ゴシック→ IPAex ゴシック
```

`jafont` を指定した場合は：

```
\documentclass[a4paper,xelatex,ja=standard,jafont=ms]{bxjsarticle}
```

その値が `zxjafont` のプリセットになる。

```
\usepackage{zxjatype}
\usepackage[ms]{zxjafont}
```

^{*6} `CJKspace` パッケージが読み込まれた下での CJK* 環境である。

^{*7} `CJK` パッケージには自動で和欧文間空白を入れる機能はない。

^{*8} ちなみに、`bxCJKjatype` には `ipaex-type1` というオプションもあるが、この設定と既定設定（オプション無し）も動作は異なる。BXJS クラスが用いるのは既定設定の方である。

2.5 Lua^AT_EX の場合

エンジン指定が `lualatex` の場合、日本語処理パッケージとして `LuaTEX-j`a を利用する。

例えば次の設定は：

```
\documentclass[b5paper,9pt,lualatex,ja=standard]{bxjsarticle}
```

次の設定と（ほぼ）等価になる（ただし `luatexja-preset` は実際には読み込まれない）：

```
\documentclass[b5paper,9pt]{ltjsarticle}
\usepackage{luatexja-fontspec}
\usepackage[ipaex]{luatexja-preset}
```

`jafont` を指定した場合は：

```
\documentclass[b5paper,lualatex,ja=standard,jafont=ms]{bxjsarticle}
```

次の設定と（ほぼ）等価になる：

```
\documentclass[b5paper]{ltjsarticle}
\usepackage{luatexja-fontspec}
\usepackage[ms]{luatexja-preset}
```

※補足：

- `luatexja-preset` パッケージの読込が行われるのは `jafont` を指定した場合に限られる。

2.6 注意事項

主に JS クラスとの違いについての注意。

- ページレイアウトについて、JS クラスの設計思想を受け継いでいるが、全く同じになるわけではない。
- JS クラスの一部のオプションで、BXJS クラスでは使用不可能なものがある。（4.3 節参照。）
- BXJS クラスではページレイアウトを設定するために内部で `geometry` パッケージを読み込んでいる。そのため、後からユーザが `geometry` を読み込むことはできない。ページレイアウトを変更する場合は、BXJS クラスが用意している再設定用の命令（6.1 節参照）か、または `geometry` パッケージが提供する再設定用命令（`\geometry` 等）を利用する。
- `hyperref` パッケージにおける“PDF の文字コード”の設定はエンジンごとに適切な値が異なっていて複雑であり、これが不適切であるために PDF 文書情報（しおり等）が文字化けしてしまう事例が数知れない。そこで、文書クラス側でエンジン毎に適切な設定を予め行うようにした。^{*9}（ただし文書クラスが `hyperref` を読み込むわけではない。）
- `pdfLATEX` 上で `hyperref` で `pdftitle` 等の文書情報に和文文字を含めたい場合は、`\hypersetup` 命令を通常通り使うことができる。^{*10}

^{*9} 従って、(u)pL^AT_EX において、ほとんどの場合に `pxjahyper` パッケージを読み込む必要がない。ただし読み込んでも構わないし、必要な場合もある。

^{*10} ちなみに、普通に `CJKutf8` パッケージを用いた場合は、この方法では失敗してしまう。恐らく `\hypersetup` 命令全体を `CJK*` 環

```
\documentclass[pdflatex,a4paper,ja=standard]{bxjsarticle}
\usepackage[colorlinks]{hyperref}
\hypersetup{pdftitle={日本語タイトル}}
```

hyperref のパッケージオプションで和文文字を含む文書情報を指定することはできない。

- jafont が無い場合の“既定のフォント設定”は多くのエンジンにおいて「IPAex フォント使用」であるが、(u)pL^AT_EX だけは異なっていて「何も指定しない状態」(JS クラスと同様)である。すなわち実際に使われる物理フォントの選択は DVI ウェアの設定に委ねられている。
- JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチ^{*11}を用いているが、これは ifdraft パッケージと衝突する。そこで BXJS クラスでは代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にしている。

3 Pandoc モードの使い方

「Pandoc モード」は文書形式変換ツールである Pandoc^{*12}での日本語 L^AT_EX 文書生成（および L^AT_EX 経由の PDF 生成）のために調整された設定である。

```
\documentclass[pandoc,<ドライバ>,jafont=<フォント指定>,<他オプション>]{<クラス名>}
```

- クラスオプションに pandoc を指定し、代わりに「エンジン」と「和文ドライバ (ja)」のオプションを省く。^{*13}
- エンジンが DVI 出力である場合のドライバの既定値が dvipdfmx になる。ただし明示的にドライバオプションを与えることで dvips などに変更できる。
- 「和文フォント (jafont)」および他のクラスオプションは従来通り使用できる。

以下で Pandoc で BXJS クラスを用いる例を示す。

- bxjsarticle クラスを使用する一例。
 - X_LL^AT_EX 経由
 - 用紙サイズは A4 判
 - 和文フォント設定は ipaex

コマンド行は次のようになる^{*14} (Pandoc 1.16 版の場合^{*15}) :

```
pandoc <入力ファイル名>-o <出力ファイル名>.pdf --latex-engine=xelatex
-V papersize=a4 -V documentclass=bxjsarticle -V classoption=pandoc
-V classoption=jafont=ipaex
```

なおこの場合、途中で生成される L^AT_EX 文書のクラス指定は以下のようになる :

```
\documentclass[a4paper,jafont=ipaex,pandoc]{bxjsarticle}
```

境で困る必要があるのだと思われる。

^{*11} スイッチなので L^AT_EX レベルの命令ではない。標準クラスではこれに相当するものは \if@draft という非公開の制御綴で定義されている。

^{*12} <http://pandoc.org/>

^{*13} pandoc が指定された場合は、エンジンオプションの値は autodetect-engine、和文ドライバの値は pandoc に固定される。

^{*14} もちろん、実際には改行を含めず 1 行で書く。

^{*15} 少し古い版の場合、変数 papersize の値は a4 ではなく a4paper と書くことになる。

- bxjsbook クラスを用いる場合の一例。
 - 節番号を出力する
 - Lua \LaTeX 経由
 - 用紙サイズは B5 判
 - 和文の基底フォントサイズは 11Q
 - 和文フォント設定は ipaex
 - 欧文フォントをPandoc の機能で設定

コマンド行は次のようになる：

```
pandoc <入力ファイル名>-o <出力ファイル名>.pdf --chapters -N
--latex-engine=lualatex -V papersize=b5 -V documentclass=bxjsbook
-V classoption=pandoc -V classoption=jbase=11Q
-V classoption=magstyle=real -V classoption=jafont=ipaex
-V mainfont="TeX Gyre Termes" -V sansfont="TeX Gyre Heros"
```

注意事項：

- bxjsbook クラスは「章 (\backslash chapter)」をもつクラスなので、Pandoc で `--chapters` の指定が必要。
- 基底フォントサイズを指定する場合、`magstyle` は `mag` 以外にした方がよいだろう。
- Pandoc で (\LaTeX 経由で) PDF を出力する場合、エンジン指定 (`--latex-engine`) は `pdflatex`、`xelatex`、`lualatex` のみがサポートされる。しかし、Pandoc の出力を「単体の \LaTeX 文書」とすることで、 \LaTeX エンジンに (u)p \LaTeX を使用することができる。出力された \LaTeX 文書は通常の方法で PDF や PostScript 形式に変換できる。

```
pandoc mydoc.md -o mydoc.tex -s -V documentclass=bxjsarticle -V classoption=pandoc
uplatex mydoc
uplatex mydoc
dvipdfmx mydoc
```

4 クラスオプション

4.1 BXJS クラスに特有のオプション

JS クラスには無く BXJS クラスで追加されたクラスオプション。

- エンジンオプション：実際に使用するエンジン (\LaTeX コマンド名) を指定する。有効な値は `latex`、`platex`、`uplatex`、`pdflatex`、`xelatex`、`lualatex` である。エンジンオプション（と次項の `autodetect-engine` の何れか）の指定は必須である。
- `autodetect-engine`：使用しているエンジンを判定して、自動的に適切なエンジンオプションを設定する。^{*16}

※ BXJS クラスの設計の思想としては、「 \LaTeX 文書がどのエンジンでコンパイルすべきものかはソース中に明示されるべき」と考えていて、従って、“人間が普通に” 文書を作る際にはこのオプションの使用は推奨されない。このオプションは“ \LaTeX ソースの自動生成” が絡む処理を念頭において用意さ

^{*16} 実はエンジンの判定は常に行っていて、エンジンオプションが指定された場合はそれが正しいかを確認して、誤りの場合はエラーを出すようにしている。

れている。

- **ドライバオプション**：DVI 出力のエンジンを用いる場合に、実際に使用する DVI ウェアの名前を指定する。有効な値は `dvips`、`dvipdfmx`、`dviout`、`xdvi`、そして特殊な値として `dvipdfmx-if-dvi` がある。これは「エンジンが DVI 出力の場合に限り `dvipdfmx` を指定する」ことを表すもので、`autodetect-engine` と一緒に使うことが想定されている。^{*17}ドライバオプションの指定は必須である。
- **pandoc**：「Pandoc モード」（3 節）を指定する。以下の設定が行われる：
 - － エンジンオプションが `autodetect-engine` に固定される。
 - － 和文ドライバが `pandoc` に固定される。
 - － ドライバオプションについて `dvipdfmx-if-dvi` が既定になる（明示指定で上書可能）。
- **nopapersize**：“papersize special 出力”を抑止する。（JS クラスとは異なり、special 出力のオプション `papersize` は既定で有効である。）
※ `papersize special` を出力する他のパッケージとの干渉に対する対策。
- **zw**（既定）：`\jsZw` と等価な命令として `\zw` を定義する。
- **nozw**：`zw` の否定。
※ 命令名の衝突に対する対策。
- **js**（既定）：JS クラス（例えば `bxjsreport` の場合は `jsbook`）が読込済であるように振舞う。
※ 「JS クラスであるかによって挙動を変える」パッケージに対する対策。
- **nojs**：`js` の否定。
※ つまり「JS クラスの一種である」と判定されると不都合な場合にこのオプションを指定する。
- **ja=<名前>**：使用する和文ドライバの名前を指定する。（詳細は 5 節を参照。）標準で提供されている和文ドライバには `minimal`、`standard`、`pandoc` がある。既定値は、エンジンが `platex` か `uplatex` の時は `standard`、それ以外は `minimal`。
- **jadriver=<名前>**：「`ja=<名前>`」の（0.9 版以前で使われていた）別名。
- **jafont=<名前>**：“和文フォントプリセット指定”の名前を設定する。
- **japaram=<値>**：“和文ドライバパラメタ”の値を設定する。
※ `jafont` と `japaram` の値がどのように解釈されるかは和文ドライバの仕様次第である。`minimal` 和文ドライバではこの 2 つの値は全く参照されない。2 節で解説した通り、`standard` 和文ドライバでは `jafont` の値が利用される。現状では `japaram` は参照されない。
- **base=<長さ>**：基底フォントサイズ（`\normalsize` のフォントのサイズ）を指定する。JS クラスの `10pt`、`11pt` 等と同じ役割で、任意の値を指定できる。基底フォントサイズの既定値は `10pt` である。
※ `##pt` の形のオプションには名前と実際に設定される値がずれているものが多く、例えば `11pt` は `10.95pt`、`14pt` は `14.4pt` が実際の設定値である。^{*18}これに対して `base=14pt` は文字通り `14pt` を設定する。
※ `<長さ>` には `calc` パッケージの式が使用できる。この他に、特別に、(u)pL^AT_EX 以外のエンジンでも `11Q` のように `Q` 単位で指定することができる（この場合は“(実数)Q”の形に限られ式は使えない）。^{*19}
- **jbase=<長さ>**：和文を基準にして基底フォントサイズを指定する。すなわち和文フォントの

^{*17} 「実際に `dvipdfmx` が指定された」場合は、`dvipdfmx` がグローバルオプションとしても働く。

^{*18} これは昔の L^AT_EX の “magstep” の習慣に由来する。

^{*19} なお、(u)pL^AT_EX ではエンジンが単位 `Q` をサポートするので、`11Q` も `10Q+1Q` も `calc` の式として受け付けられる。

`\normalsize` のサイズを指定の長さとする。^{*20}

※〈長さ〉の書式は `base` オプションと同様。

- `scale=〈実数〉`：和文スケール値を設定する。既定値は 0.924715 (= 13Q/10pt) である。^{*21}
- `noscale`：`scale=1` と同値。
- `paper={〈横幅〉}{〈縦幅〉}`：用紙サイズ設定。`a4paper` 等と同じ役割で、任意の値を指定できる。用紙サイズの既定値は A4 縦 (210 mm × 294 mm) である。
- `mag=〈整数〉`：版面拡大率 (mag 値) の直接設定。既定は `base` から算出する。
※ mag 値が n の場合、版面が $n/1000$ 倍に拡大される。
- `magstyle=〈値〉`：“版面拡大”の実現方法を指定する。有効な値は `mag`、`real`、`xreal` の何れか。詳細は 4.5 節を参照。

4.2 JS クラスのオプションで使用可能なもの

これらについては名前だけ列挙するに留める。ただし、“JS クラス特有” (標準クラスに無い) オプションの一部については解説を加える。

■用紙サイズ指定 `a3paper`、`a4paper`、`a5paper`、`a6paper`、`b4paper`、`b5paper`、`b6paper`、`a4j`、`a5j`、`b4j`、`b5j`、`a4var`、`b5var`、`letterpaper`、`legalpaper`、`executivepaper`。

※ `a4var` は A4 変判 (210 mm × 283 mm)、`b5var` は B5 変判 (182 mm × 230 mm)。

※ (BX) JS クラスでは `a4j` は `a4paper` と全く等価である。(他の `b4j` 等も同様。)

■横置き `landscape`。

■基底フォントサイズ `8pt`、`9pt`、`10pt`、`11pt`、`12pt`、`14pt`、`17pt`、`20pt`、`21pt`、`25pt`、`30pt`、`36pt`、`43pt`、`12Q`、`14Q`、`10ptj`、`10.5ptj`、`11ptj`、`12ptj`。

※ `10pt`、`11pt`、`12pt`、`14pt`、`17pt`、`21pt`、`25pt`、`30pt`、`36pt`、`43pt` はそれぞれ `magstep` の 0、0.5、1、2、3、4、5、6、7、8 である。`8pt`、`9pt`、`20pt` は文字通りの値。`##Q` / `##ptj` は `jbase=##Q` / `jbase=##pt` を表す (つまり和文規準)。^{*22}

■両面用レイアウト `oneside`、`twoside`、`vartwoside`。

※ `vartwoside` は `twoside` と同様だが傍注が常に右側余白に出力される。

■段組み `onecolumn`、`twocolumn`。

■表題ページ `titlepage`、`notitlepage`。

■起こし `openright`、`openany`。

※ `jsbook` のみ (BXJS では `bxjsreport` と `bxjsbook`) にのみ存在するオプション。

■数式配置 `leqno`、`fleqn`。

^{*20} この場合に決定される mag 値は和文スケール値にも依存することに注意。

^{*21} これは JS クラスの設計に基づく値である。ただし実装の都合で、JS クラスの実際のスケール値はこれから僅かだけずれている。

^{*22} ちなみに JS クラスの (固定の) 和文スケール値に従うと `10pt` が `jbase=13Q` に相当するので `13Q` というオプションは無い。

■オーバーフル警告 final、draft。

■papersize special 出力 papersize。

※ BXJS クラスでは papersize は既定で有効。

■英語化 english。

4.3 JS クラスのオプションで使用不可能なもの

- クラス変種指定：report、slide。
※ report 相当は bxjsreport、slide 相当は bxjsslide と別クラスになっている。
- トンボ出力：tombow、tombo、mentuke
※これは p_{AT}E_X のカーネル命令を利用しているのでとりあえず除外。
- 和文フォントメトリック指定：jis、winjis、mingoth。
※異なるエンジンで汎用的に扱うのが難しい。
- 和文数式フォントの登録の制御：disablejfam。
※前項と同じ理由。^{*23}

4.4 クラスオプション設定の既定値

- BXJS クラス共通：a4paper、onecolumn、final、ja=minimal、jafont は空、japaram は空、scale=0.924715、magstyle=mag
- bxjsarticle：10pt、oneside、notitlepage
- bxjsreport：10pt、oneside、titlepage、openany
- bxjsbook：10pt、twoside、titlepage、openright
- bxjsslide：36pt、oneside、notitlepage

4.5 magstyle オプション

JS クラスにおけるページレイアウト決定の過程では、基底フォントサイズが 10pt 以外の場合に、“版面を拡大縮小する”という処理を採用している。^{*24}これには、「フォントのオプティカルサイズの選択を最適にするため^{*25}」という理由があり、またこれにより、多種の基底フォントサイズへの対応が容易になるという利点もある。^{*26}ところがここで、JS クラスではこの“版面の拡大”を実現するために T_EX エンジンが持つ版面拡大機能（仮に「mag 設定」と呼称する）を用いていて、これについて批判されることが多い。また、現実問

^{*23} ただし、こちらは一部のエンジンだけでも対応したほうがよいかも知れない。

^{*24} 例えば、基底フォントサイズが 20pt だとすると、まずは指定されたものの半分の縦横幅をもつ用紙に対して基底フォントサイズが 10pt としてレイアウトを決定し、それを縦横 2 倍に拡大する、という過程をとっている。

^{*25} L_AT_EX の既定の欧文フォントである Computer Modern フォントがオプティカルサイズの性質をもつことは有名であるが、少々癖が強く、本文を 10pt (cmr10) で組んだ場合と 12pt (cmr12) で組んだ場合でかなり異なった印象を受ける場合がある。JS クラスではそれを嫌って、本文 (`\normalsize` のフォント) が必ず「cmr10 を拡大縮小したもの」で組まれることを企図しているのである。

^{*26} BXJS で「任意の」基底フォントサイズが設定できるのもこの利点があるため。

題として、mag 設定が L^AT_EX で用いられる機会は少ないため、実際に用いられた時にそれを想定していないパッケージが誤動作するという問題もある。

これらの問題を緩和するため、BXJS クラスでは“版面拡大”について他の実現方法を提供している。それを選択するのがクラスオプションのmagstyle である。^{*27}

- magstyle=mag (既定)：JS クラスと同様に、“版面拡大”のためにmag 設定を用いる。
- magstyle=real：mag 設定を一切用いず、代わりに、全てのページレイアウトのパラメタの値をスケールさせる。`\normalsize` や `\large` 等の高位フォントサイズ命令で指定されるフォントサイズもスケールさせるが、“オプティカルサイズの調整”は行わない。いわゆる「基本 35 書体」のようなオプティカルサイズでない^{*28}フォントのみを用いるのであれば、この設定が最も適切である。
- magstyle=xreal：real と同様に、全てのページレイアウトのパラメタの値をスケールさせる。さらに、“オプティカルサイズの調整”を実現するために、NFSS の実装コードにパッチを当てる。^{*29}この場合、mag 設定による不具合は起こらなくなるが、当然、NFSS のパッチのせいで別の不具合が起こる可能性はある。

5 和文ドライバ

BXJS クラスでは様々なエンジンについて、そのエンジンおよびそれに対応するパッケージが提供する日本語処理機能を活用することで、日本語用の文書クラスとしての機能を実現している。そこでの汎用性を確保するため、“日本語処理機能と連携する部分”の実装をモジュールとして分離していて、これを和文ドライバと呼ぶ。^{*30}BXjscls のバンドルでは次の 2 つの和文ドライバを提供している。

- standard和文ドライバ：各エンジンについて、最も一般的に用いられる特定の“日本語処理機能”（例えば lualatex なら LuaT_EX-j_a）を連携対象とした和文ドライバ。(u)pL^AT_EX 上の JS クラスと同じくらい容易に日本語が書き始められることを目指している。
- minimal 和文ドライバ：“何も実装されていない”和文ドライバ。上級ユーザがプレアンブルや自作パッケージ等にアドホックな連携コードを書いて、好きな“日本語処理機能”との連携を実現するために用いることを想定している。
- pandoc 和文ドライバ：「Pandoc モード」で仕様される和文ドライバ。基本的にstandardと同じ設定を用いるが、「Pandoc の既定の latex テンプレート」が使われることを前提として、それと BXJS の設定を整合させるための措置を加えている。

和文ドライバは自分で作製することも可能である。^{*31}`bxjsja-XXX.def` (XXX は任意の文字列^{*32}) の名前のファイルに実装コードを書いてそのファイルを配置すると、`ja=XXX` のオプション指定でその和文ドライバを利用できる。

^{*27} ところで、このオプションキーの値 (mag, real, xreal) はかなりイマイチなんだけど、もっと素敵な名前はないものだろうか……。

^{*28} 或いは、オプティカルサイズに“変な癖”のない。

^{*29} 要するに、`OT1/cmr/m/n/12` が要求された時に、`cmr12` でなくて `cmr10 at 12pt` が選ばれるようにする。

^{*30} `graphicx` パッケージ等の「ドライバ」と類似した概念のためこの名称を用いた。

^{*31} 和文ドライバの実装に必要な連携仕様の情報については、ソースコード説明書 (bxjscls.pdf) の付録 A を参照してほしい。

^{*32} カテゴリコード 11 または 12 の文字からなる必要がある。

なお、和文ドライバ指定オプション (ja) の既定値は `minimal` である。現実には、ほとんど全ての場合に `standard` が用いられると思われるが、種々の理由があって、これを既定値にはしていない。

※ただし、(u)pL^AT_EX については、日本語処理機能がエンジン自体に備わっていて不可分なため少し異なる扱いになっている。^{*33}`minimal` を用いる意義がほとんどないため、`standard` が既定値になっている。

6 ユーザ用命令

原則として、BXJS クラスで追加されたものだけを説明する。

6.1 レイアウト設定関連

BXJS クラスではページレイアウトの設定に `geometry` パッケージを用いて次の手順で行っている。

1° (基底フォントサイズにより決定されたmag 値を実際に設定する。)

2° `geometry` で次のパラメタを設定する。

(a) クラスオプションで指定された用紙サイズ、および `trueedimen`。

(ii) `bxjsarticle` / `bxjsreport` の場合は次のパラメタ値。

```
headheight=10pt, footskip=0.03367\paperheight,
headsep=\footskip-\topskip, includeheadfoot,
hscale=0.76, hmarginratio=1:1, vscale=0.83, vmarginratio=1:1
```

(iii) `bxjsbook` の場合は次のパラメタ値。

```
headheight=10pt, headsep=6mm, nofoot, includeheadfoot,
hmargin=36mm, hmarginratio=1:1, vscale=0.83, vmarginratio=1:1
```

(iv) `bxjsslide` の場合は次のパラメタ値。

```
noheadfoot, hscale=0.9, hmarginratio=1:1,
vscale=0.944, vmarginratio=1:1
```

3° 後処理を行う。以下の処理が含まれる。

- `textwidth` を全角幅の整数倍に、`textheight` を整数行分の自然長になるように丸める。
- `marginpar` 関連の設定を行う。

ページレイアウトの再設定のために次の命令が用意されている。

- `\setpagelayout{⟨設定⟩}`: 現在のページレイアウトの設定の一部を修正する。⟨設定⟩は `geometry` のパラメタの記述であり、現在の設定に追記して `geometry` が再設定を行った後、再び 3° の後処理が行われる。
- `\setpagelayout*{⟨設定⟩}`: 用紙以外の設定をリセットして改めてページレイアウトの設定を行う。具体的には、2° の(i)と ⟨設定⟩の内容を用いて `geometry` が再設定を行った後、再び 3° の後処理が行われる。

なお、`\geometry` 命令を直接呼び出すことも可能である。当然この場合は 3° の後処理は行われない。

^{*33} JS クラスの実装から分離した「日本語処理関連」のコードを `minimal` に配置している。

6.2 和文用設定関連

- `\jsZw` : 和文の全角幅を表す。
- `\zw` : `\jsZw` の別名。^{*34}ただし `noz` 指定時は定義されない。

6.2.1 standard和文ドライバの場合

`standard` 和文ドライバ使用時を指定した時) は和文に関連する文書ソース記述をエンジンに依らずに共通になることを目指している。従って、和文関連の組版パラメタの設定^{*1}についても「共通の命令」が提供される。

- 和文ファミリー変更命令: `pLaTeX` と同様に、`\mcfamily` で「明朝」、`\gtfamily` で「ゴシック」に変更される。`\textmc`、`\textgt` も使える。
- 欧文ファミリー変更命令での和文の連動: JS クラスと同様^{*35}に、`\rmfamily` で和文が「明朝」、`\sffamily` および `\ttfamily` で和文が「ゴシック」に変更される。
- `\zw` : 和文の全角幅を表す。例えば `2\zw` が `pLaTeX` の `2zw` に相当する。
- `\jQ`、`\jH`、`\trueQ`、`\trueH` : それぞれ `pLaTeX` の単位 `Q`、`H`、`trueQ`、`trueH` に相当する長さ。
- `\ascQ` : `\trueQ` を和文スケール値で割った長さ。^{*36}例えば、`\fontsize{10\ascQ}{16\trueH}` で和文のサイズが `10Q` になる。
- `\setxkanjiskip{<長さ>}` : 和欧文間空白の量を指定する。`pLaTeX` での `\setlength{\xkanjiskip}{<長さ>}` に相当する。
- `\getxkanjiskip` : 現在の和欧文間空白の量を表す文字列に展開される。`pLaTeX` での `\xkanjiskip` の読出^{*37}に相当する。
- `\autoxspacing` / `\noautoxspacing` : 和欧文間空白の挿入を有効／無効にする。`pLaTeX` の同名の命令と同等。
- `\setkanjiskip{<長さ>}` : 和文間空白の量を指定する。`pLaTeX` での `\setlength{\kanjiskip}{<長さ>}` に相当する。
- `\getkanjiskip` : 現在の和文間空白の量を表す文字列に展開される。`pLaTeX` での `\kanjiskip` の読出^{*38}に相当する。
- `\autospacing` / `\noautospacing` : 和文間空白の挿入を有効／無効にする。`pLaTeX` の同名の命令と同等。

例えば、`pLaTeX` において、次のように「和文間空白」を利用して均等割りを行うという技法が知られている。

^{*34} `LuaTeX-j` では「実際の全角幅」を表す命令 `\zw` (`pLaTeX` の `zw` と本当に等価) が規定されている。`lualatex` エンジン指定かつ和文ドライバが `standard` の場合はこの `\zw` の定義がそのまま使われる。(従って `noz` は実質的に無効である。) なお、`\jsZw` は「規約上の全角幅」であり、「実際の全角幅」と本来は一致するはずだが、実際には計算誤差のせいで僅かに値が異なる。

^{*35} ちなみに、(u)`pLaTeX` の既定ではこの連動は起こらない。

^{*36} 命令名は“anti-scaled Q”の略。

^{*37} `TeX` 言語でいうと `\the\xkanjiskip`。

^{*38} `TeX` 言語でいうと `\the\kanjiskip`。

```

%% \kintouwari{<整数 n>}{<テキスト>}
% n 全角の幅にテキストを均等割りで出力する.
\newcommand\kintouwari[2]{%
  \setlength{\kanjiskip}{\fill}%
  \makebox[#1zw][s]{#2}}

```

これと同等のものを、次のようにエンジン非依存な形で書くことができる。

```

\newcommand\kintouwari[2]{%
  \setkanjiskip{\fill}%
  \makebox[#1\zw][s]{#2}}

```